

第6回キャンパスおだわら運営委員会 会議概要

日 時	平成27年2月10日（火）午後1時30分から3時30分まで		
場 所	小田原市役所 議会全員協議会室		
委員長	齊藤 ゆか	出席	学識経験者
副委員長	瀬戸 充	出席	生涯学習の向上に資する活動を行う者
委員	金澤 久美子	出席	学識経験者
	左京 泰明	出席	
	有賀 かおる	出席	生涯学習の向上に資する活動を行う者
	安藤 恵	欠席	
	岩屋 泰彦	出席	
	与那嶺 信重	出席	
	石井 悦子	出席	公募市民
	永田 圭志	出席	
	立花 ますみ	欠席	教育委員会が必要と認める者
事務局	(文化部) 諸星部長、安藤副部長 (生涯学習課) 友部課長、大木担当副課長、村田係長、 佐久間主任、田中主事		
キャンパスおだわら事務局	奥村NPO法人小田原市生涯学習推進員の会理事長 福島NPO法人小田原市生涯学習推進員の会理事		
キャンパスおだわら人材バンク実行委員会	太田委員長		
傍聴者	なし		

※委員は選出区分別五十音順(委員長・副委員長除く)

1. 開会

安藤副部長より、参考資料2の差し替えについて説明。

2. 議題

(1) 開設講座について

キャンパスおだわら事務局（以下、「C事務局」）

資料1に基づいて説明させていただく。

こちらは、前回第5回の運営委員会以降に申請されたもので、一部開催済みの講座も含め、主に2月からの講座で全体として73講座が該当する。今回は2月28日及び3月1日に開催予定の、人材バンクフェスティバル「子どもと大人のおもしろ学校」としてキャンパス講師が実施するものが31講座ある。ジャンル別に見ると全部で7分野あり、文学・歴史、語学・国際交流など以下同様に展開されており、スポーツ・アウトドアが27講座37%、福祉活動・社会活動が10講座14%である。また、その他のジャンルも22講座30%という状況になっている。その他のジャンルには趣味・実用や娯楽・芸能などが包括されており、総体的に多い数になっている。

左側の区分に【お】と表示があるものは、小田原ならではの講座を表しており、【子】と表示があるものは、子どもを対象としている講座である。今回は、子どもと大人のおもしろ学校が開催される関係で【子】の講座が41講座56%を占めている。

説明は以上である。

これらの講座は、キャンパスおだわら事務局で仮認定した講座であり、もう一度委員の皆様にご確認いただきたい。

委員長 ただ今の説明に対して、何か質問や意見はあるか。

有賀委員 講座回数が1ではない講座がある。「連続」と書かれているものは連続講座だと思うが、例えばN○13の「はじめての実用書道、仮名書道」は、「連続」と書かれておらず、講座回数が2となっている。これは内容が同じで受講生が違うということでしょうか。

C事務局 「連続」と書かれているものは連続講座だが、それ以外で講座回数が複数回のは、同じ内容の講座が複数回実施されるということである。

有賀委員 N○40の親子リズム体操は4回の講座回数があるのだが、開催時期が3月

1 日のみとなっている。これは3月1日に4講座全てを行うということか。それともまだ日にちが設定されていないのか。

C事務局 この講座については、3月1日の午後の時間帯に、複数の場所で別個に開催されるものである。

有賀委員 会場が違うということか。

C事務局 同じ会場だが、場所が違うということである。

永田委員 No32のバドミントンは、開催時期と時間がそれぞれ2つ記載されている。2月28日が午後で、3月1日が午前ということか。
No34のスポーツ吹矢は、3月1日の午前、午後1回ずつ計2回開催ということか。

C事務局 そのとおりである。

委員長 子ども向けの講座で、講座回数が2や4となっているものは、同じことをやっても人が集まる人気講座なのか。
キャンパスおだわらの開設講座について、開設予定の講座については報告していただいているが、実際に実施された講座について、何%くらい成立しているのか、情報はるか。

C事務局 講座の成立については、ほぼ100%に近い状況である。ただし、開催される前に、計画の段階で中止になる講座もあり、それを含めると成立は90%程度となる。

委員長 特に人が集まる講座の傾向はあるか。

C事務局 開設講座については、人気の講座という意味では、健康志向の講座、体を動かす講座の参加者が増えている。しかし、講座ごとに個別の特性があるので、一概には言えない。

人材バンク実行委員長（以下、「実行委員長」）

2月28日と3月1日に実施する「子どもと大人のおもしろ学校」については、子どもから大人まですべての年代を対象に毎年開催している。先ほど言われたように、健康志向の講座が人気である。キャンパス講師の登録は約100人だが、同じ内容の講座を続けていると飽きられてしまう。キャンパ

ス講師ではないが、小田原漁港の生魚を持ってきて料理する、そういったものを取り入れる。また、スポーツであれば、キャンパス講師に次はこういうスポーツをやって欲しいとこちらからお願いするなど、コーディネートをすることで、同じ講師でも食いつきが良くなるなど、工夫はしている。傾向的には冬のせいもあり、圧倒的に健康に関する講座が人気である。

委員長 今の話は、全体的に健康志向であるということと、講師が100人いてもマンネリ化している部分もあるということ。事務局から意図的に違う内容のジャンルとか、内容の工夫を提案することで、バラエティーに富んだ講座ができていて、ということが傾向としてあるということである。

与那嶺委員 ニーズに沿ってコーディネートしていくことは必要である。

金澤委員 受講料の横に材料費とある。受講者は受講料プラス材料費を払うということだと思うが、例えば、行政が行う講座は受講料無料であるなど、何か基準はあるのか。

実行委員長 人材バンクが実施する企画講座については、運営費が必要であり、チラシや印刷代などもそこから賄うので、1講座につき子ども300円、大人500円の受講料をいただいている。親子で同時参加の場合、材料が別々に必要であれば、2人分の材料費をいただいている。ただし、行政職員に講師を依頼する講座は、受講料は無料とし、材料費はいただくという決まりで運営している。

C事務局 行政関係の講座については、行政目的を実現するために無料の講座が多い。一般の市民講座の場合は、受講料によって講座を運営する必要があるので、受講料をいただいている。

金澤委員 そのような基準であると、主催が人材バンク実行委員会となっている講座に受講料がかかるのは分かるが、「体を動かす親子のびのび教室」など、県立西湘地区体育センターで実施している講座も受講料がかかっている。この主催者は公的な機関ではないのか。

C事務局 すべての講座が一律の基準ということではなく、原則的にということである。

委員長 それは受け手として違和感があるのか。

金澤委員 受講料を比べてみると、No15の「体を動かす親子のびのび教室」から下

段にまとめて連続講座があるが、受講料が4,000円など比較的ほかの講座に比べて、高めの設定になっている。5回講座であれば、1回あたり800円ほどになる。体を動かすのに材料費はかからず、公的な施設を利用している中で、料金設定はこのくらいが適正なのか、それとももう少し抑えられるのかなど、受講者から見て納得できるものであるかについても検討が必要である。

委員長 1回であれば500円とか300円と書いてあるので、それほど高くは感じないが、連続講座で5回分をまとめると4,000円とか4,500円となるので、利用者にとって妥当に感じるかどうかということになる。その点はどうか。申し込みの段階で問い合わせなどはあるか。

実行委員長 3年ほど前までは、子どもも大人も受講料は300円であった。人材バンクという名前になったのは2年ほど前からで、その前も同様の事業は行っていた。その時は一律300円で、行政が主催の講座は無料とし、材料費はいただくという基準であった。500円に値上げをした段階で、高すぎるのではないかと意見があるのではないかと、我々も非常に気にしていたが、アンケートでは、300人に1人程度の割合で無料にしてほしいという意見があったものの、ほとんどは適当ではないかという意見が多かった。連続講座は8回だと1回500円で4,000円。今のところはアンケートで高すぎるという意見は多少あるが、問題になるほどではない。割合としては妥当の方が圧倒的に多い。我々はそれでほっとしている。

委員長 全体的には受益者負担の方向にあり、人材バンクが実施する講座は大人が500円で子どもが300円。それに対する苦情は、現在のところはあまり見られないということかと思う。
親の感覚だと、習い事に行くよりは安い、といった感覚なのかもしれない。一方で、経済的に厳しいとか、今日の報道でもあったが、育児疲れで子どもを殺害してしまうとか、そういう切羽詰まった状況のかたは、あまりこういう講座に申し込みをしないケースが多い。そういった方々も参加できるような設定ということも、行政講座の中では検討の余地があるのかもしれない。それでは、仮認定の講座については、認定ということによろしいか。

(異議なし)

委員長 それでは、資料1の講座については認定とする。

(2) キャンパスおだわらのあり方について

①重点改善項目の進捗状況について

委員長 議題(2)キャンパスおだわらのあり方について進めていく。今日は大きな議題というよりは、これまで私たちが議論してきた内容の進捗状況確認ということになる。まず①重点改善項目の進捗状況について、資料2、参考資料1だが、説明をお願いします。

友部課長 それでは、議題「(2) キャンパスおだわらのあり方について」「①重点改善項目の進捗状況について」説明する。

資料2をご覧ください。

前回までの本運営委員会において、重点改善項目として実施することとなった4件について、現時点での進捗状況を報告する。

まず、1番上の「市民ニーズの把握について」であるが、今年度の行政講座で共通アンケートを試行的に実施しており、2つの講座で実施が済んでいるので、次の議題のところで、この結果に基づく検証を踏まえ、アンケート様式の最終決定をお願いしたいと思う。なお、今後は、4月以降に開催される講座での本実施へ向けて、各方面への共通アンケートの利用依頼を行いたいと考えている。

次に、2の「情報発信について」であるが、可能なところから順次改善すべく、検討を行っているところである。まだ具体的な改善案は固まっていないが、本日は「参考資料1」として、NPO法人小田原市生涯学習推進員の会が作成した同会で検討中の案を提示させていただいた。なお、前々回の運営委員会で方向性の一つとして提示させていただいた、自分時間手帖とおだわら市民ガイドとの統合については、おだわら市民ガイドの発行業者側の都合により、1年ほど見送ることとなった。

続いて、3の「キャンパスおだわらの円滑な運営について」であるが、前回の運営委員会で承認いただいたキャンパスおだわら人材バンクの再検討について、検討組織を立ち上げ、1月23日に第1回目の会議を開催した。再検討会議のメンバーについては、表に記載のとおりであるが、本運営委員会からは、有賀委員と岩屋委員に参加いただいている。

1回目の1月23日には、人材バンクとは何か等について意見交換を行った。次回は2月19日の開催を予定している。

最後に、4の「まちづくりに生かす人材の育成について」であるが、前回の運営委員会で承認いただいた人材育成講座の試行的実施に向けて、現在、検討を進めている。なお、今後事務局がこの取組を進めるに当たって、講座コーディネートの豊富なノウハウを持ち、本運営委員会においても様々な角度

から貴重な意見をいただいている左京委員に、別途アドバイスをいただきたいと考えている。

以上で、重点改善項目の進捗状況について報告を終わりにする。

委員長

1の市民ニーズの把握については後の議題として説明していただけるということなので、飛ばすこととする。

2の情報発信については、2、3回時間を使って議論したが、私たちの発言は言い尽くしたと思われる。その内容を検討していただいて、行政で方向性を定めるとのことかと思う。

3のキャンパスおだわらの円滑な運営についてだが、こちらは有賀委員と岩屋委員に出席していただいた。1回目は参加者の紹介や検討内容の把握ということが重点だったと思うが、いかがか。

岩屋委員

まず1回目ということで、ワークショップ形式で行われたが、私にしても、キャンパスおだわらの中での人材バンクの位置づけが明確ではないというのが現状である。さらに、ここで言う人材バンク再検討の検討範囲がどこまでなのか。人材バンクは2つの団体と行政で構成されているわけだが、当然、NPO法人小田原市生涯学習推進員の会にしても、人材バンク事業以外の学習情報などにも関わっているのが現状かと思う。そういう中で、人材バンクを見直すというのは、どこまでを含めているのかというのが、まだ私の中でははっきりしていない。要するに、何を見直すのか、例えば、情報発信についてだが、キャンパスおだわらの事業の中で学習情報というものにあたると思うが、この部分と人材バンクとの関わりなどが、自分の中で明確になっていない部分がある。

前回の会議の中でも、実際に事業に携わっている人材バンク実行委員会の方々との間での温度差があった。例えば、理想的な人材バンクというのは何か、というふうに描いた場合にしても、それぞれ皆の思いが違う。そういうことが現状で、結局何もまとまらなかったかなと思っている。

今、私なりに、人材バンクとは何か、キャンパスおだわらとは何か、というところを、本来で言えば初めてこの運営委員会に参加した時に、そのあたりをもっと詳しく見れば良かったのだろうが、なかなか見ることができなかった。再度、すべてではないが、人材バンクの会則などから見直しをしているところである。有賀委員とも一緒に情報共有しながら、様々な角度から考えていき、実際に見直さなければいけないものはどういうものなのか、あるいは人材バンクが、キャンパスおだわらの中でどういう位置づけで、それがどこにどう関わり、どのように改善していくと、最終目標で挙げられた、教える側と教えられる側が自主的という部分と、これを裏で支える方々がやりがいを持ってという部分が達成できるのかを考えていきたい。やりがい

やモチベーションは、行政とボランティア団体とは違うと思うが、こういうベースになる部分をしっかりと自分の中で認識したうえで今後取り組んでいきたい。今のところ、先はまだまだ見えないし、それなりに急がなければならないのだが、結論を急がずに十分に調査確認しながら、本当に実現可能なものを考えていきたいと思う。

有賀委員 初回であり、当日も人数が5人だけで、どういう感じで進めていくのかなと思っていた。最初に人材バンクとはというテーマでワークショップをやってくださいということだったが、漠然としていてとらえ方が難しいなと感じた。既存のキャンパスおだわら人材バンク事業にはとらわれずにという感じであったので、どこから取り掛かっていいのかがすごく難しく、これからという感じがする。人材バンクのとらえ方など、これから勉強していきたいと思う。

委員長 その時のコーディネートは誰が行ったのか。

大木副課長 行政である。

有賀委員 あっという間に2時間が過ぎた。

委員長 ワークショップを2時間で行うのは難しい。

岩屋委員 ワークショップが基本的にはほとんどできなかったというのが現状である。付箋に書くにしても漠然としすぎて、細かいことを書くかたもいれば、漠然としたものを書くかたもいる。それをまとめた時に、そこから何かが見えてくるのかということについては、各委員の意識共有のベクトルが合わないと、難しいと思う。そこで、先ほどの話ではないが、私も勉強し直そうということである。

有賀委員 全体像が見えていないので、その点をもう少し検討しなければならない。

委員長 キャンパスおだわらの目指す方向や目標、重点内容については、皆で共有して運営委員会の中でディスカッションをしたので、ある程度、やるべき事、実際できているのかできていないのか、重要であるかどうかということは議論できた。しかし、キャンパスおだわらの中で、協働で事業を運営している人材バンクの位置がどこにあり、実際何をすべきか、何をお願いするべきなのかという範囲がなかなか見えづらいのではないかと。また、行政と民間との仕事のすみ分けという要素も入ってくる。

岩屋委員

まだそこまで行かず、人材バンクがどういうものなのかというイメージを考えている段階である。例えば、私も人材バンク再検討会議で、最初に人材バンクとは何かを考えた時に、バンクである以上銀行であり、銀行はお金を預かって、それを企業などに融資して利益を得る。そう考えると、キャンパスおだわら人材バンクの預ける人は誰なのか、融資するのは誰なのか。そういうふうに考えると、それが利用者であったり、講師であったりする。うまく講師を使ってそこでお金を集めるとか、さらに講師にはその利益からいくらかを渡す。それでまた講師のかたにやってもらう、というような、あくまで銀行と考えるとそのように捉えられる。しかしながら、キャンパスおだわら人材バンクは、民間の銀行とは違い利益を求めようとはしていない。だとすると、教えたい人と学びたい人がいれば、そこは自主的にいくのではないか。それをうまくつなげるものがあると、そこが円滑に回っていくのではないか。そうすると、例えばホームページなどをベースにして教えたい人と学びたい人をつなぎ、極力サポートを減らしていく、また、ホームページ上からリンクして施設予約も全部できるようにするなどの方法が考えられる。また、こういうことを教えて欲しい、というところからカテゴリを選ぶと講師が表示され、その中から好きな人を選ぶと、その人に対して、教えてもらえないかというようなやり取りもできる。しかし、これだけだと、変な人が入ってくると困るので、そこに承認体制をしっかりと置いて、誰かが承認したらアップされるなどの仕組みが考えられるが、果たしてそういうことが実現できるのかどうかという部分もある。加えて、行政からの支援で成り立っているわけだが、全国をみると寄付で成り立っているところもある。寄付などという取り組みを今まで、キャンパスおだわらや、行政の中でやってきたのかというところもある。そういう部分で過去の経緯も分からない。現状も今分かっていない状況である。そういうものを全部踏まえた上で、今後考えていくのだらうと思う。

考え出すと楽しく、正直、この運営委員会の中で、今が楽しい。楽しんで取り組ませてもらっているが、まだまだ何も固まっていない。ただ、自分なりに考えていて、有賀委員とも、キャンパスおだわら運営委員として参加しているので、運営委員としてベクトルを合わせて取り組んでいければと思う。

委員長

人材バンクに対してのイメージを岩屋委員が話してくださったが、いかがか。

石井委員

人材バンクには、ところどころしか関わっておらず、最近になって関わり始めたので、そうなのかと納得しつつ伺っていた。分かりやすい説明をいただいた。

委員長

人材バンクについて、もちろん現状で実施していることもあるが、人材バン

クを定着・発展させるために、何かコメントや、こうした方が良いのではないかなどの意見はあるか。

永田委員 岩屋委員の説明でイメージは何となく掴めた。しかし、まだ全体像は見えていない。その先がどうなるのか、未来像がどうなるのか、どう作るのかということを考えていく必要がある。

与那嶺委員 私も、人材バンクは人間の講師の銀行としてとらえていた。学びたい人が、講座が欲しいとしたら、その人が講師料や材料費を支払うと思っていた。そういうイメージがあった。

瀬戸委員 岩屋委員の話聞いて、楽しんでいられる中で、だいぶ苦労もあるだろうと思う。こうやっていけたら、というところに辿り着けたら良いと感じた。

金澤委員 私も岩屋委員の話聞き、今は本当に根本的なところですり合わせしているのだと分かった。人材バンクは漠然と、ただ人材が集まっているところかと思っていたが、このキャンパスおだわらを運営していくための仕組みとして、講師の人たち、運営するための仕組みなども含めて、人材バンクなのかもしれない。登録した講師の人が、これが教えられるということでそれぞれ得意なものをもっていると思うが、そこをスキルアップしていく仕組みや、ただ登録したら使ってくれというだけではなくバージョンアップしていく、そのような成長モデルも必要なのではと思う。

委員長 重要なことであると思う。生涯学習の人材バンク制度は以前からあるものであるが、行政の悩みとして、いつも登録は多数されるが、その人たちの顔が見えないため、怖くて頼めないということがある。結局講師はたくさん集まるが、それを使いこなせないということが行政課題として良く言われる。特に学校教育などで、どこかに派遣して行っていただく場合に、どういう人なのか、どういう素性のかたなのかということが分からないので、誰でも登録はできると言いながらも、実は良く知っている人でないと怖くて頼めない実態がある。もう1つの課題は、実際に人材バンクとしてこういうことができると立派なことが名簿に書いてあるが、お願いした場合、実は自分ではできますとやったほど、講師としてはあまり適任ではないという人が、どうしても現れてしまう。そのようなことが現状としてあり、お願いする側としては、絶対に皆が満足してくれる人をという思いから、どうしても同じ人に何度も頼んでしまうという課題がどこの市でもある。しかし、キャンパスおだわらの場合の人材バンクはもっと含意が広いのではないかと思う。

左京委員

岩屋委員の発言などを聞いていると、人材バンクもキャンパスおだわら事業も一貫して抱えている課題が共通していると思う。何かというと、次のまちづくりに関してもそうだが、課題があいまいであるという点である。岩屋委員が何を見直すのかということ自体があいまいだと感じるというところも、まさにそういう点であると思う。情報発信のところも、そういう状況なのではと想像している。まちづくりの方もそうだが、結局、どうあるべきなのかと。永田委員が言われたように、未来の姿、あるべき姿と言ってもよいかもしれないが、それは何か、その部分と現状とのギャップが課題だとしたら、その課題が何なのかということが見えなければ、解決しようがない。キャンパスおだわらを見直す全体の議論が始まった時に私が申し上げた、あるべき姿を考えよう、そのためにまず現状の認識をしよう、そのギャップを課題として解決していこうという話で色々な指標などを得てきたが、まだその思考様式が身につけていないとか、各分野に落ちてくるとその部分があいまいになってきてしまっている現状があるのではないかなと思う。情報発信にしても、キャンパスおだわら人材バンクにしても、今後実施するまちづくりに関する講座にしても、あるべき姿は一体何であり、現状はどうで、そのギャップたる課題は何なのか、という部分を整理していかないと、何からどう手を付けていけば良いのか迷ってしまうということが状況として出てくると思う。

委員長

キャンパスおだわらのあるべき姿について、全体としては昨年の1月に議論を行い、あるべき姿を設定し、その項目に従って評価してきたが、各事業内容に移行したところになると、果たしてそれと全体とどうリンクしているのかが見えない部分があり、キャンパスやバンクなど、言葉が大きいので、その点で余計に分かりにくくなる。キャンパスおだわら運営委員としても分かりにくいということは、市民にとってはもっと分かりにくいということになってしまうので、大きな課題であるということが言えるのではないかなと思う。

左京委員

人材バンクについて、前回までに自分の記憶をたどりながら想定される課題というところで話したこととしては、簡単に分けても、人材バンクの講師になる方々に関連する課題、あるいはその講座を受ける人の集客などに対する課題、講座が組み立てられるプロセス、人材バンクに登録したかたがプログラムに参加者に供給するにあたり、そのかたの本当の良さが引き出されていない、あるいは引き出されているのだがその良さが伝わっていないなど、そのようなことに関連するところにあるのではないだろうか。例えばそのような形で人材バンク全体をどうしようかということではなく、現状何が起きているのかということから、どこが足りないのかということから課題を見出していくと、その具体的な施策が見出されるのではないかなということ

発言した記憶がある。

委員長 一年前に議論した内容があるが、それが重点項目やキーワードとして、具体的な部分だけが活用されているので、議論した内容についてはもう一度、そこでの項目も再度落とし込み、活用できそうな内容は活用し、再整理するという必要かと思う。引き続き、お二人、大変だとは思いますが、運営委員の代表としてお願いしたいと思う。

友部課長 言われるとおり、1月23日に1回目の人材バンク再検討会議を実施してみて、運営側も人材バンクとは何かというところを深く知らなかったことが、逆に洗い出されたと個人的には感じた。それはそれで収穫だったのではないかと思う。そもそも人材バンクとは何なのかというところを明確にしたうえで構築していかないと、現状は手段が目的化、人材バンクありきで物事が進んでいる感じがする。そうではなく、いろいろなニーズが積み重なっていく中で、最終的にはこれは人材バンクが必要であるとなるのが、本来の姿ではないかと思う。最初は、バンクというとらえ方からしても皆の考えが違っていた。そういうレベルからすり合わせをして、考えを同じにし、少しずつ作り上げていくことで、最終形が人材バンクという形になるようにしていければと思う。

委員長 実際にキャンパスおだわらに付随して、人材バンクというキーワードが市民に披露されるわけなので、それを活用する市民にとっても分かりやすい、私たちにとってももちろん分かっているという前提を作っていかなければならないということが、ここで言えるのではないかと思う。
では、4のまちづくりに生かす人材の育成については、具体化に向けて検討中といったところだが、左京委員から何か意見はあるか。

左京委員 まちづくりというのは非常にいろいろな意味があり、具体的な活動としても用いられるコンセプトによって、いろいろなことが考えられる言葉だが、間違いなく言えることは、まちづくりというのは、ある行為や、活動、アクションを指している。つまり、課題か解決策かと言ったら、解決策にあたると思う。では、その行為、アクションは、何の課題を解決し、どういった理想の姿を目指すのかというところが前提としてないと、何に向けて活動しているか分らないということになる。今、私が事務局にお願いしているのが、ここでいう小田原のまちづくりというのは、どういった課題に対して取り組んでいくことなのかという、課題の洗い出しである。また、小田原市のまちづくりに関する課題といってもいろいろなものがあると思いき、例えば、すでにほかの所管で取り組んでいるような課題、あるいはどう考えても

生涯学習課が担当する守備範囲ではないなという課題は除外したとして、それでも生涯学習課の守備範囲として関わってくるような課題とはいったい何か、という視点で、まちづくりに生かす人材の育成ということが前提となる課題から整理をしていこうという話をしているところである。

委員長

小田原市はまちづくりに力を入れている。2、3年前も学会や総務省から賞をもらうなど、まちづくりに関して、キャンパスおだわら以外のところでも、例えば無尽蔵プロジェクトや市民改革などのキーワードが先立っていて、そのような意味では、すごく活発にされている側面がある。キャンパスおだわらは基本的に生涯学習課が管轄しているところなので、生涯学習として何ができるか、まちづくりとどうリンクしていくかということも、大事になってくるところかと思う。

まちづくりに生かす人を育てるという意味で、市民改革としてどういう課題が見えてくるかということについて話し合いたいと思う。まちづくりというと、イメージの含意が広すぎるので、まちづくりという言葉を外しても良いと思うが、そういう人を育てるにはどうしたら良いか。地域の課題を解決するような人をどうやって育てたら良いか。

石井委員

結局、地域の活動をする人というのは自治会が主で、いろいろな活動を小田原市はしていると思うが、そこに参加されているかたは、やはりリタイヤされたかたが多い。60歳以上とか、上は80歳を過ぎていてもやってくださるかた、長くやってくださるかたがいる。そうすると、できればもっと若い人たちも参加して欲しいと言われている。しかし、活動するのに、平日は若い人たちはなかなか参加しにくく、内容が昔からのものをずっと継続しているため、それだけのことをたくさんやれない。若い人が参加しても、入ってみたらこれは無理だなと感じ、任期が終わった後に自治会を抜けたかたなどの話を良く聞く。それでは本末転倒であって、せっかく参加してくれたのに、参加したために抜けてしまうというのはもったいないことなので、活動の仕方などもいろいろと変えていっても良いのではないかと感じた。私も何年か前に自治会に参加した時には、あまりにも活動することが多すぎる、同じことが重なる、ということが多かったので、それがもう少し少なければ、若い人もここだけ参加する、役はやらないがここだけなら参加できるという関わりがたができる。また、そのような情報があれば、参加しやすいと思う。

委員長

今の話は、地縁組織を担ってくれるまちづくりをする人、その人たちは割と年齢の高いかたが多く、もう少し若いかたに参加してほしい。だが、参加の内容が非常に濃すぎるため、もう少し参加のレベルをいろいろと濃淡をつけて提供していくといったことが解決策の一つかもしれない、ということであ

る。

永田委員 キャンパスおだわら運営委員会の初期のころに話し合ったのだが、まちづくりをするということは、コミュニティを形成することである。そのような話を諸星部長がされていたかと思うが、そのイメージが残っており、今の石井委員の話もそうだが、結局そういう集まりや、友達同士のつながりなどをいろいろバラバラな中でも作っていき、それが大きくなり、まちづくりになるというイメージである。そのきっかけの一つとして、キャンパスおだわらを使用する、そのようなものだと思う。

委員長 今の永田委員の話で言うと、コミュニティを作るには、テーマが必要だという話で、地域の課題として、どんなテーマが必要とされているのかということを確認しないと、まちづくりを育成するという、何をどうするかということさえも見えてこないということなのかなと思った。それは、大事だと思う。

瀬戸委員 地域コミュニティということで、小田原市の中には、自治会として大きく26の連合会があり、そのうちの19の連合会は、いろいろな活動をしている。残りの7つの連合会はまだ動いていなくて、そのうちの一つが私の連合会だが、12日にまちづくり委員会として発足する。私の自治会は、小田原城の周辺だが、何が地域で問題かということで、各団体のかたに集まっただけ、それを解決するにはどうしたらいいかということから始まり、お年寄りのかたの引きこもり、小田原市の中心街なのにまちが汚れている、単位自治会が7つあるが、自治会そのものは活動しているが隣の自治会が何をやっているか知らないとか、まちの掃除をしても一部の人がやっていないであるとか、防災訓練をやってもうまく実践につながらないというような課題がいろいろ出て、一度に全部はできないが、できるものからやっとうと考えている。また、小田原市には大きなお祭りがあるが、子どもたちが少なくなってきた中で、どうしたら楽しいお祭りができるかということを検討する予定である。みんなで集まって太鼓を叩いてはどうか。ところが太鼓にはいろいろな流儀があって、なかなか一つのたたき方では難しい。それから、自分のところには太鼓を叩くお祭りはないが、叩きたい子どももいるだろうから、みんなで叩いてみたらどうか、ということから始めようと思う。そういうことをしていくと、何をやるにしても、自治会の中には何かの特技を持っているかたがいるので、そういうかたにご指導いただきながら、いかにして自分たちが住みよいまちになるか、安全なまちにするにはどうしたらいいか、ということ動き始めようとしている。人材育成というのは、特に育成しなくても経験者がたくさんいるので、その経験を持つかたに、気持ち良

く指導者として来ていただく雰囲気を作っていけば良いのではないかと思います。

委員長 いくつもテーマがでてきたと思うが、1つ目は高齢者の独居老人の問題、孤立の問題、孤独死とかそういった問題も出てくるので、高齢化の問題ということがテーマとしてある。2つ目は環境の問題ということが挙げられたと思う。3つ目は防災の問題、4つ目として祭りや文化、伝統をどうやって守り続けていくのかということが挙げられたと思う。全体でいうと、つながりがなく、組織ができていても連携がないなど、実際にはそのあたりが地域課題になっている。自治会の役割としては人間の生活を守っていく、生命を守っていくということが第一なので、そういった人材の育成、あるいはそういった人たちをどうやって育てるかということが大事だと思う。大きく4つのテーマが話の中で挙げられた。

金澤委員 話されたテーマは、どこの地域でも問題になっており、そのテーマを解決するために連携して、目標を立ててそこに向かってというような形で活動していくと、自然に人のつながりができ、地域の担い手ができていくのだろうということは、頭の中では理解できる。

委員長 大学としても、学生が小田原市周辺に住んでいて、若い学生がいると思うが、そのあたりと連携してまちづくりとして何かできそうなことはあるか。短期大学で忙しい学生がほとんどだと思うが、まちづくりというと若い人がということが良く言われる。

金澤委員 通常、大学だと、2年とか4年とかの期間しか学生はいなくて、巣立ってしまえばあとはあまりつながりが無いということが多いが、小田原短期大学の場合は、とてもこじんまりしていることもあり、卒業生が遊びに来たり、仕事が無くなって、また就職課に来たりと、比較的卒業生と大学とのつながりが強い。それが特色かと思う。コミュニティの中で若い人が出たり入ったりできるような、巣立っても戻って来られるような仕組みができないかと思う。

委員長 まちづくりの中でも若い人が自由に出入りできるような仕組みができないかということ。巣立ったと思ったらみんな就職してしまう、その繰り返しなので、そのあたりの出入りができるような参加形態を作っていくということか。

金澤委員 そうすると、若い人が自分はこのコミュニティが居心地が良いと感じるなど、なにか帰属意識が持てる関係だと、戻ってきやすくなる。

委員長 その地域の人の顔が見えて、若い人がふらっと現れるという関係性。今、大

学がセンター・オブ・コミュニティ、COCというのだが、大学を地域の基点にして、そこで学生を育て、なおかつ地域のコミュニティの課題を学生と地域がともに解決していくといったことに対してお金を出そうとしている。安倍政権は、地域創生を重要視しており、それに一番お金を使うと言われていている。小田原市はその地域創生の対象になっているかどうか分からないが、例えば、私が所属する大学は千葉県松戸市にあり、首都圏の大学ではない。首都圏ではない大学に対して国は、少子化などの地域課題解決をするために、大学の資材と若者を地域に提供し、その地域の他の大学と連携して、地域を活性化していこうという大学に対してお金を出すと言っている。要は、学生を地域に出せというのが社会貢献の一貫として義務化されており、大学の評価になっている。それをやらない大学は潰れるという、危機的な状況でもある。小田原市は、3大学あるので、そこで、大学開放としてどうやって連携していくか、そこには若い学生がいるので、そのようなことも一つ考えられる。まちづくりの中で考えられることもあるかもしれない。

瀬戸委員 確かに地域はまず受け皿を作らなければならない。

委員長 しかし、教員の立場からすると、学生が借り出されるだけではだめで、そこに教育効果があるのかということや、頻度などを確認する必要がある。一番集まりやすいのは太鼓やお祭りなどの単発事業で、そういうことにはみんな喜んで参加する。そのような参加しやすいものがあるので、そのあたりを検討し、一緒に作りだす。そういったことももしかしたら、期待としてはあるのではないか。

有賀委員 今、学生を地域にということが挙げられたが、学校現場では、やはり学校へ地域のかたを、という連携に向けて、先日もスクールボランティア事業の報告会があった。小田原市でも10年ほどになるが、スクールボランティア事業に力を入れているということをお伝えできる。先日、皆さんにも紹介した「未来につながる学校づくり成果報告会」も、約250名の地域のボランティアのかたやコーディネーター、先生がたが参加し、あの場だけではなく、ほかのかたたちにも伝えていきたいという意見が多くあった。それから、つながりということでは、私はまちづくり、地域おこしのための講座を昨年の9月に受けた。その際と同じ受講生たちが、「グループ同じだね」というグループを作り、現在も毎月1回会っている。ただ会っているだけでは意味がないが、皆さん個々にそれぞれ活動しているので、まずはその活動に乗る形でつながっていききたいとの考えを持ちながら、毎月情報交換している。先日集まりがあった時も、やはり、皆が自分の活動の情報を持ってきた。例えば、小田原を知ろうということで、小田原巡りをしようという提案があ

り、高齢のかたも多いので3時間くらいのまち歩きだが、3月7日に集まることになった。参加予定者は多くないが、少しずつつながっていったらと思う。関係としてはゆるく、このようなところから始めてどうなのか、という部分もあるが、グループの中には、しっかり自分で講座を受けて、目的をもって活動しているかたもいるので、そういうかたに付く形で、少しずつでもつながっていったらと思っている。

委員長 学校に協力してくれる方々の年齢層などは、どういう特徴があるか。

有賀委員 どちらかというが高齢のかたが多い。授業の中で活動するボランティアの中には、自分の子どものところに入りたいという保護者は多いが、例えば、畑やものづくり、昔遊びなどに対しては、地域の自治会のかたなどを巻き込んで行うという形である。

委員長 逆に我々のような中年層の女性、子育て中の親たちが生涯学習の領域にあまり協力しなくなったという傾向が全国的にある。なぜかという、働かないと生きていけない時代になっているからである。そのため、なかなか女性の地域の支え手がいなくなっていると言われている。そういう母親たちの協力体制はどうか。

有賀委員 やはり、やる人が決まってくる、なかなか広がらないという現状がある。もちろん一生懸命やって下さるかたはいるが、一人で何役もやっていて、役員もやりコーディネーターもやり、ボランティアもやるという感じで、広がりはない。そのあたりをもう少し掘り起こして、色々なかたに参加していただきたいと思う。

委員長 まちづくりとして、中年層を地域に送り出すコツは何かということが多くの書物に書かれているのだが、子どもの事業をやると必ず親が参加してそれを見に来る。その見に来る頻度を増やし、せっかくだから少し手伝ってもらおうというような機会を準備することによって、参画者を増やしていく、そのような手法があるらしい。子どもを大事にすることによって、まちに参加してくる親を増やし、親の層を増やすという考え方である。

有賀委員 小学校まではそうだが、中学生になると、親はもう来ないでくれということになってしまう。そして親はどんどん離れていってしまう。そこで、地域のかたにお願いして、見守っていこうという動きになっている。

委員長 お父さんたちの集いなどについては、小田原市はどうか。

有賀委員 おやじの会などがある。割とお父さんたちの絆は強いと思う。中心になってくれるかたがいると集まってくる。

委員長 岩屋委員、企業の視点からいかがか。

岩屋委員 まず、企業の視点の前に、私の経験になるが、私も子どもが小さいとき、そのころはPTAや団地の自治会や子ども会などの参加者は、基本的にはほとんど女性だった。ところが私の場合は、妻の具合が悪くなって、私が出なければいけなくなった。子ども会も全員女性の中に副会長で入り、PTAもほとんどが女性の中に一人で入ったが、私の中ではすごく良い経験であった。男ばかりが集まっているところは、正直自分が出て会社にいるのと何も変わらない。ところが周りが女性ばかりの中に自分が男として入っていく。その代わり、目的は決まっている。何をしなければいけないか、そこでは女性も男性もなく一緒に取り組んでいくという経験ができて、それは自分の中ですごく良かった。先ほどの話で言うと、おやじの会などではなく、男女が共にできるような形になっていくと、さらに活発になっていけるのではないかと自分の中では思った。嫌がる人もいるとは思いますが、私はそれがなかったので、楽しんでやれた。何かそういう機会が作れると面白いと思った。また、まちづくりに関してだが、人材バンクのことを勉強していて、小田原市民活動サポートセンターがあることを知った。そのホームページには、まちづくりの推進というカテゴリがあり、そこを開くと団体が多数表示されるので、皆が活発にまちづくりに取り組んでいるのだろう。しかし、キャンパスおだわらでいうまちづくりに生きる人材というのは、育てた後どうするのか、その人たちにどのように活動して欲しいのかということがないと、どういう人材を育てていけばいいかということが分からない。やはりその部分が無いと、例えば、先ほどの市民活動サポートセンターの登録団体をもっと増やそうとすると、そのための人材をキャンパスおだわらで作る。有賀委員が言われていたが、みんなで集まって活動を始めた。それを団体として登録し、今度は横のつながりを広げていきながら実施していく。そういう部分が無いとなかなか難しいと思う。サポートセンターには多くの団体が登録されている。それを、人材バンクでもつながりが取れたら良いと思いついて見ているのだが、結局キャンパスおだわらとサポートセンターに登録されている団体と、実際どういう位置づけが理想なのか。ベースになるのがキャンパスおだわらであり、そこから生涯教育という形でいろいろな人材なりを育てていき、その方々が各団体を立ち上げて、そのことによって小田原市自体を活性化していこうというような位置づけのものなのか、そういうところによっても変わってくる。実際に活動されているかたは数多くいる。しかし、先ほどの話にもあつ

たが、高齢のかたが多くてなかなか若いかたが育ってこないとする、むしろキャンパスおだわらの目的は、高齢の方々ではなく、もっと若い世代を後継者に育てていくなどの形もあると思う。まちづくりの人材という定義を明確にし、キャンパスおだわらならではという、しっかりとした目標なり、どういう人材が必要なのかということを確認したうえで考えていく、育成していくというのが必要であると感じた。

委員長

サポートセンターは、市民活動を担当する課が所管している。行政は縦割りで、生涯学習は生涯学習課、市民活動やNPOは市民活動担当課のような形で、そこがリンクして一緒にできないことが、他市でも課題になっている。私がいる聖徳大学のある松戸市では、お互いに人を取り合っているような状況が実際にある。そういうことはいろいろな市で起きている。サポートセンターのNPOの方々やボランティア団体の方々の悩みは、高齢化していること。NPOを立ち上げて10年経っている団体も多くあり、理事長や代表がずっと一緒だということで、活動がマンネリ化し、団体はあるけれども、実際の活動はされていない幽霊団体が増えていることが大きな課題になっている。そのような課題がある中で、2つの事例を紹介したい。

1つは千葉県市原市であるが、ここでは5年間、まちづくり塾というものを実施していた。まちづくり塾を実施していた時には、だいたい30人ほどが集まっていたが、その30人はうまく育たず、5年間続けたが失敗したという事例がある。なぜ失敗したかということ、まちづくり塾という名前のイメージからか、集まった人の9割が男性で、若いかたは政治家志望や、いろいろやってみたいというようなかたがいて、60代以上の方々は、ここに鉄道を通したいとか、まちに対するいろいろな思い、夢がたくさんありすぎて、その夢がお互いにぶつかって、なかなかうまく集約できなかったという問題があった。そのまちづくり塾のメンバー自体が、行政のクレーム集団的なものに膨れあがってしまい、そのような難しさが生じてしまった。その失敗から、2年制の市民大学を立ち上げて、月2回のペースで、子育て支援コース、環境コース、観光コース、健康コースという4つ領域のコースを設定した。今、80人から100人が1学年にいるが、満員御礼で大成功している。なぜ成功したかということ、1つは各課からどういう人を育てて欲しいかということを出してもらい、そこで課題の把握をして、その課とプログラムと一緒に摺り合わせながら、こういう人を育てたい、育てた人たちにこういうふう活躍してもらいたい、こういう場で活躍してもらおうということを明確にして市民大学を作ったからである。まだ立ち上げ段階なので分からないが、2年間かけて、ゆっくり仲間関係を育て、人を育てることを行っている1つの事例である。

もう1つの事例は、山形県南陽市であるが、そこは若者のまちづくりで成功

したところである。人口3万、4万の小さな規模の市なのだが、やはり少子高齢化により若者が減り、雇用が無いため若者が外部へ出ていってしまうという悩みを抱えている。そこで、市長が100万円の懸賞を出そうということで、10～20代限定で、プレゼンをして、お金を獲得しようというプロジェクトを立ち上げた。若い人はお金が無いから、お金の飛びつくところがあり、そのお金欲しさに多くの若者がそのプロジェクトに参加した。違う市に住んでいる人も南陽市のプロジェクトに参加して、プレゼンのやり方や提案の仕方を、学生や若者、学生ではない人に対して教えて、プレゼンをさせ、実際に実行させて、それで成功したところに懸賞金をあげるという流れで実施した。懸賞金については、取りやめにしようとか、1つの団体に100万円は大きすぎるから分散しようかなど、いろいろ課題になっているらしいが、お金をあげることによって若い人たちが集まり、若い人たちが自分で実際に実行したことをネットなどで配信したり、コミュニティのメディアなどに放映したり、新聞に載せたりすることによって、活躍の場を与え、そこで定着をしていくという狙いがある。また、そのグループがコミュニティビジネス化している事例もある。左京委員が行っているシブヤ大学もその先進事例として紹介できると思うが、それぞれ特色があるので、行政で実際にどうまちづくりの人材育成をしていくかということが問われると思う。左京委員、いかがか。

左京委員 この短時間で伺った意見の中にも、かなりヒントがあったのではないと思う。やはり実際に地域で生活しているかたの声の中には、非常にその地域における具体的な地域の課題を知るための有用なヒントがあると思った。こういったことをやはりもっとたくさんのかたに尋ねてまわること、聞く機会を作るということが先決なのではないかと思う。その中で、すべてに万遍なく対処していくということは難しいと思うので、何らかの考え方をもって優先順位を付けていき、取り組むべき課題が設定できたら、その課題に対する解決策や、どのような人たちがその解決の担い手になるのかという方向で考えを進めていくという順序かと思う。

委員長 それぞれの立場から発言いただけたと思う。これらを受けて、ぜひ、左京委員にお願いしたい。皆さんもぜひ、ご協力いただきたい。

②市民ニーズの把握について

友部課長 それでは、「②市民ニーズの把握について」説明する。
資料3「キャンパスおだわら共通アンケート検証結果と改善点について」を
ご覧いただきたい。

共通アンケートにつきましては、1の「共通アンケート実施目的」にあるとおり、キャンパスおだわらの目指す姿である「市民ニーズに対応した講座が提供されている」状況を実現するため、講座参加者のニーズ把握のために各種講座で統一的な項目を調査するもので、講座関係者と集計結果の情報共有を図り、市民ニーズに対応した講座の提供に生かすことも目的としている。先ほど報告したが、2つの行政講座で「資料4」によりアンケートを試行した。「参考資料2」がその結果をまとめたものである。

資料3にお戻りいただきたい。

「2. 検証結果」であるが、2つの講座における試行の結果を踏まえて、今後この共通アンケートをキャンパスおだわら全体に広げた際に、市民ニーズに対応した講座の実施などに役立つ情報を取得できるかという視点で検証を行ったものである。改善すべき点については、「検証結果」の欄に黒丸を付している。

では、アンケート項目の目的に沿って、順次説明する。

まず、主に「動機」の把握を目的とした設問であるが、設問1「この講座を何でお知りになりましたか」については、情報の入手経路を属性等と組み合わせることで、戦略的な広報活動が可能となるので、有効な設問であると判断した。

設問2の「講座に参加された動機は何ですか」は、選択式であるが、統一項目により動機の傾向を読み取ることができ、設問3「この講座に何を期待して受講されましたか」では、動機を深掘りする形で把握できることから、それぞれ有用であると判断した。設問3については、記述式の設問のため、集計作業に手間と時間がかかるが、次の設問4との関連性からも必要な項目であると考えます。

次に、主に「満足度」を計るための設問であるが、設問4「この講座の内容は期待どおりでしたか。」については、単純に満足したかどうかだけを聞くよりも、その理由も記入してもらうことで、設問3の回答との連携が可能であり、より具体的な把握ができるということで、有用であると判断した。

設問5「この講座を受講した感じたことは何ですか。」については、受講後の変化を把握することで、学びの成果を確認することを目的としたものであるが、「感じたことは何ですか」という当初の設問の文章では、「6. その他」を選択したかたが記述欄に単なる感想、例えば、今回の例では講師の服装に関する記述などであるが、それらを記入することがあるため、本来こちらが意図している内容の回答が得られるよう意味の分かりやすい文章に変更したいと考えている。変更後の設問文については、後ほど「資料5」で説明する。続いて、主に「ニーズ」を把握するための設問6、7、8であるが、これらの項目については、アンケート結果を時間帯、場所、講座内容ごとに検証することでニーズをつかみ、講座の企画・検討に生かすことができるため有用

だが、質問の仕方について一部改善が必要と考えている。

設問7「あなたは開催場所に何を求めますか。」については、選択項目がいずれもそうであれば良いと感じるものであり、「複数回答可」にしたところ、すべてに○をつける受講者が多いという結果になったことから、より必要なニーズを把握するため、「特に求めるもの1つに○をする形へ変更」すべきであると考えた。

設問8「講座についての感想やご意見、今後取り上げて欲しい内容等」については、講座内容のニーズ把握が設問の主目的であるため、こちらは、「今後取り上げて欲しい内容」のみとし、「講座についての感想やご意見」は自由記載欄を別に設けることとしたいと考えている。

最後に、属性を把握するための設問9～12であるが、これらの設問で把握した属性とその他の設問を組み合わせることで詳細な分析が可能となることから、いずれも重要な設問であると判断している。

なお、設問11「職業について」については、試行実施した講座が平日昼間の開催で、受講者の年齢層が高かった関係もあるが、「その他」を選択し、「無職」「主婦」と記述するカタが多数を占めたことや、「主婦」等も属性として捉えて把握する必要があるというように考えることから、選択肢を見直すこととし、他の事例を参考に「無職・定年退職者」「主婦（夫）」を追加したいと考えている。

以上のとおり、黒丸の4つの改善点があるが、これらを反映して、作成した共通アンケート案が、資料5となるので、そちらをご覧いただきたい。

設問5、7、11のアンダーラインを引いた箇所が変更点である。また、8の設問の文章の最初の部分にあった「ご意見やご感想」については、一番下に自由記載欄を新たに設け、記入していただくというものである。

以上で資料の説明を終わるが、先の進捗状況報告でも説明したとおり、平成27年度から本実施していきたいと考えているので、この改善案の形で進めてよいか、協議いただきたい。また、今後のアンケート結果分析に必要な視点などについてもぜひ意見をいただければ思う。

よろしく願います。

委員長

プレ調査を実際に実施し、改善案が示されたということで、資料5が最新のものになる。これを見て、やりやすいかどうか、実施しやすいかどうかの確認、もう1つはここからどういうものが見えてくるのかという、結果の分析方法について、2つの観点から発言をお願いします。

まず、アンケート様式は改善案の内容で良いかどうかの確認だが、その点いかがか。

有賀委員

設問5の「あなたの中で変化がおきましたか」というところで、変化がおき

ましたかという設問だと、選択肢の中に、何もおきない、というものが必要と思われる。また、設問の内容を変えるとしたら、どんな変化がありましたかなどの聞き方が方が答えやすいと思う。

委員長 変化がおきましたかは、イエス、ノーで答える項目ではないので、どんな変化がありましたかの方が良いのではないかと、ということである。ほかにいかがか。

与那嶺委員 設問11に対する回答の、「定年退職者」は何か意味があるのか。

委員長 先に、意見をいただきたいと思う。ほかにいかがか。

金澤委員 設問4の「講座の内容は期待どおりでしたか」というのが、おそらく受講者の満足度にかかるものであろうと思うが、期待以上、期待どおり、ほぼ期待どおりなど、普通の調査の仕方は知らないが、真ん中の数字がニュートラルという感じで選択肢を作ることが多いと思う。今回の様式では、真ん中がほぼ期待どおりであるので、おおむね期待どおりだろうと予測しているようなニュアンスが、1から5の数字に感じられる。また、期待どおりイコール満足度なのかということが分からなくなってしまった。なぜかという、理由欄は自由記入だが、そうすると、期待以上だった、しかし、もう少しここを改善して欲しいといった感想が書かれることも想定される。実際に、試行実施の結果資料では、3ページのほぼ期待どおりの理由記述のところに、ほぼ期待どおりであるにも関わらず、「少し深く講座して欲しい」、「生データが多いが何を言いたいのか不明の部分があった」など、何となく改善してほしい点を理由欄に書いている。本人はほぼ期待どおりに丸をしたが、理由のところには否定的な部分の意見が書かれており、ちぐはぐな感じを受けた。そのため、期待どおりだったとしたら、どういうところが期待どおりだったか、改善してほしい点があるとしたらどういうところを改善すべきかなど、質問項目を分けた方が良いのではないかと思った。

岩屋委員 講座のあと、アンケート結果をどうするかということだが、通常、アンケートを実施する場合は、ある特定の講座があって、それに対してどうでしたかということになると思う。目的としては、基本的にその講座を続けていくとした場合に、次にどう改善したら良いかという内容のものと、これからいろいろな講座を作るときの情報にするのかということによって、設問内容が変わると思う。今は、両方が混在している感じがする。そうすると、例えば私はどちらかという文字を書くのが嫌いで、書きたくないと思ってしまうのが正直な話である。例えばだが、期待どおりでしたか、という質問で、私な

どは期待どおりだったら理由を無理に書きたくない、良かったというならそれで良いのではないかと思う。何か期待はずれがあったなら、そのかたたちにはどういうところが期待はずれかを聞くと良いのだが、期待どおりであり、さらにその理由のことまで詳しく聞き、より高みを求めるとなると、それはその講座に限ったところに関してさらに良くしようというような位置づけのものなのかなということである。また、もしこれが講座全体のことではなく、講座の内容でもなく、講座の開催場所や講座の開き方、時間帯など、内容が様々になると、集計がさらに大変になるのではないかと思った。そう考えると、これをあとでどのように生かすのか、どの程度の頻度でこれを集計し、運営委員会の中で集計したものを見て、それはどのような形でフィードバックしていくのかという部分がはっきり決まらないと、アンケートはとったが、ほとんど生かされずに終わってしまう。むしろ、どのように使いたいということが決まったうえでアンケートの内容を考える必要もあるのではないかと思った。

委員長

発言内容としては、設問4の期待どおりの項目がこれで良いかどうかという選択肢のレベルの話と、理由を書く必要があるのか、理由ではなくて改善策として書いてもらったほうが良いのではという書き方の問題、設問5は、あなたの中で変化がおきましたか、ではなく、どのような変化がおきましたかのほうが良いのではないか、また、設問11の設問に対する選択肢「定年退職者」というキーワードが必要なのかといったことが挙げられた。最後に、感想欄に、改善策などを書いてもらったほうが良いのではないかという発言があった。実際にプレ調査を実施して、良かったという部分が多くあると思うが、その点を踏まえていかがか。

佐久間主任

設問4の期待どおりの部分については、通常の満足度だと、満足、やや満足、普通、やや不満、不満ということで、選ぶだけで終わってしまうのだが、ほぼ期待どおりだったという中でも、ほぼということは完全に期待どおりでは無かったということにつながるので、その理由を詳しく聞く意味でも、期待どおりだったという方々の理由を聞いて良いのではないかと考えている。設問5については、聞き方のご意見をいただいたので、こちらについては検討させていただければと思う。

定年退職者については、実際、職業欄に定年退職者や市のOBと記載するなど、同じ無職であっても、定年退職を迎えたかたが無職のところに丸をつけることに対して、多少抵抗があるのではという理由で設けた。実際に対象の方々がどう思われるかということがあり、意図的に書かせていただいた。

岩屋委員

先ほどの話で一部もれていたが、アンケート様式の中に講師に対するの評価

項目が無い。「参加された動機は何ですか」という設問の回答の中に、講師が魅力的とあるが、結果、本当にそうだったのかとかという講師に対する評価は必要ないのか。人材バンクにもつながると思うが、講師は多数登録されている。しかし、多数いるが、そのかたが全員講座を開くわけでもない。管理をすると、その講師が適切なのかということの評価する必要があるのではと思う。それはアンケートのどこで行うのか。設問2の講師が魅力的というのは、動機が魅力的ということだが、結果はどうだったかということに対しては、何も無い気がする。講座の内容に関してはあるが、講師に関してというものも必要なのではと思った。設問4の中に講師の評価についても含まれていると思うのだが、アンケートの内容の中に講師の評価、講座の内容、運営の仕方、会場が快適だったかなど、いろいろな要素が含まれるのかと思うと、あとで評価する時に大変だと思う。理由を書িয়েくれば良いが、書いてくれなかったら、単純に期待どおりだったということのみになってしまう。もし、講師に対しての評価にもこのアンケートを使うのであれば、項目として分けたほうが良いのではないかと思った。

委員長 今の話は、設問4の内容に、理由を書িয়েもらうのではなく、項目に丸をつけてもらうというイメージか。

岩屋委員 講師はどうであったか、実際の講座の内容がどうであったか、という形に分けるほうが、後々その情報が使えるのではないかと思った。内容は良いけれども講師がいまいちという意見も、無いとは言えない。

大木副課長 先ほどの事務局（佐久間主任）の説明に補足させていただく。岩屋委員から先ほど質問があった、アンケートを何にどう使うかという話であるが、一義的には全体の講座を把握したいという意図がある。個別の講座でこれを出していこうというのではなく、アンケートを全体に広げることで、今キャンパスおだわらの中でどういう講座がどのような状態にあるのか、どういう人たちが受けているのか、全体のその講座に対する満足度、動機など、大きな流れを把握したいという点が一番の理由である。また、個別の講座でどう活用していくかということについては、企画者のかたにアンケート実施の協力をお願いする時に、それぞれ個別の講座に活用したいという項目については、裏面に別途付け足すなどして対応してもらう予定である。

岩屋委員 了解した。アンケートの目的や、何のためにアンケートを取るのかということがまず無いと、内容がなかなか判断できないと思っていた。これはどちらかということ、将来的にずっとこのままというわけでは無く、まず現状を知っていこうというためのアンケートということか。

大木副課長 大きなニーズを把握していくということである。それから設問4の満足度だが、ここについては、キャンパスおだわらの指標でも満足度を定めていただいたが、その判断に使わせていただきたいということがある。指標では、講座の満足度100%を目指すという内容になっているので、どちらかというと、満足してもらったことにつけてもらいたいものになっている。変更するとなると、やや満足の部分を普通にするなど、そういう表現になるのではと思う。設問5の「あなたの中で変化がおきましたか」については、我々の中では、基本的に変化することが講座の目的であるという考えから、どちらかというとイエス、ノーを聞き、そのイエスの中の選択肢をここに設けた。確かにノーの選択肢が無いので、我々の狙いからすると、選択肢にノーを付け加えるかどうかということになる。

委員長 実際に設問5を行ったときに、ノーの選択肢はあまり必要なかったということか。

大木副課長 設問の聞き方が、イエス、ノーを聞く形ではなかったため、ノーの選択肢を付けなかったという理由もある。

委員長 いくつか意見をいただいたので、今のご意見を受けて、修正する部分は修正していただいて、アンケートを実施してみる。そして、また時期を見ながら必要に応じて改善していくという形になるのではないかと思います。

岩屋委員 設問4の表現についてだが、設問3が、「この講座に何を期待して受講されましたか」なので、これを受けるのであれば、「この講座の内容は期待どおりでしたか」の「内容」という言葉はいらないのではないか。講座は、と聞くほうが、範囲が広がるので表現としては良いのではないかと思った。

委員長 講座の内容に限定しない方が良いのではないかということだが、その部分に関してはいかがか。

大木副課長 狙いの中心は、内容を聞くことにある。設問2の参加された動機として、会場、曜日、時間などが選択肢にあるので、そのあたりまで期待度として判断されると少し困るという思いがある。通常は、あえて「内容は」と記載しなくても、内容のことを聞いていると感じると思うが。

委員長 そうとは言い切れない。なぜかという、場所が近いからという動機はかなり大きい。講座内容の期待ではなく、近いから、行きやすいからとかという

参加理由もかなりあると思う。この設問で内容のことを聞きたいのであれば、逆に「内容」を外さないほうが良いと思う。

友部課長 内容がどうだったかについて聞きたいという思惑がある。はっきりと内容と書かせていただいた方が良いと思う。確かに広くとらえるという考えかたもあるが。

委員長 この部分は内容の満足度に限定して聞きたいということか。

友部課長 そのとおりである。

左京委員 資料3の「共通アンケート実施目的」には、目指す姿として「市民ニーズに対応した講座が提供されている」を実現するためにニーズ把握をすると書かれており、目的は明確である。記録として残しておきたいこととしては、市民ニーズの把握をするために、講座参加者以外のかたのニーズをどう把握していくかということが、非常に大きな問題になるのではないか。20万人の市民のうち、講座に参加されているかたは、非常に限定された一部の人であり、このテーマに関心のあった人たちであり、広く市民のニーズにあった講座を提供していくということからすれば、まだ参加していない人たちのニーズをいかにくみ取るか、ということも合わせて考えていかなければならないと思う。もう一点は、このアンケートはいずれも、PDCAのCにあたるかと思っているが、特にこの中で重要と思われるのが、設問2、3の参加された動機に関してである。今、このような形で選択肢が示されているが、ここに主催者側として、どのような仮説をもっているのかということが重要だと思う。例えば、シブヤ大学に来られるかたの動機には、内容に興味があるということはもちろん概ねそのとおりなのだが、例えば職場や家庭以外に人のつながりが欲しいかたや、お年寄りのかたであれば、安価に人と会話ができる場所に足を運びたかったなど、例えばそういうニーズがあったとしたら、その講座の内容や組み立て方なども変わっていく。内容についての動機だけでなく、参加者同士の会話やコミュニケーションも動機としてあるのであれば、必ずその講座の中に自己紹介を入れていく、座学で聞くだけではなく、何かコミュニケーションが誘発されるワークショップ形式の時間を取り入れてみるなどすることにより、動機に対して適切な路地ができていくということだと思う。それが実は設問8の「今後取り上げて欲しい内容等」に関わってくる。つまり、主催者側として生涯学習環境を拡充していく際に、地域の人々の中にどういう内なるニーズがあるかという仮説を持っているのか、それをどう満たしていこうとしているのか、という仮説が重要だと思う。そのあたりが、分かりやすい時間や曜日や場所ではなく、もう少し深い動機とい

うところに対して、常に仮説を持っていくということが重要であると思う。アンケートだけでなく、インタビューであったり、出口調査のようなことも合わせてやりながら、より良い講座の内容や形式等のアップにつなげていければ良いのではないかと。

委員長

重要な点を指摘していただいたのではないかと思います。1つは次への課題になると思うが、参加者以外のニーズ把握、もう1つは動機について、もう少し潜在的なニーズ把握も重要なのではないかと。私も、シニアのかたには、なぜこの講座に参加したかということ全員に話してもらおう。主に、健康でいたい、ボケたくない、みんなとおしゃべりしたいなど、シニアの講座だとそんなふうに言われることが多い。そのような、本当の理由といったところがアンケートでは見えない部分もあるので、そのあたりの把握をどう考えるかといったことが挙げられた。

- ・次回の運営委員会は平成27年5月13日(水)午後開催予定。近日中に時間と場所を確定し案内を送付。

以上